

先生方の「深い学び合い」から、「深い学びにいたる授業」の実現へ

①「深い学びにいたる授業」を通して、育成したい生徒の姿の検討

資質・能力との関連から生徒の姿を具体的に検討する



☒ この授業で何を深く理解させたいか


☒ どの知識・技能を関連付けさせたいか

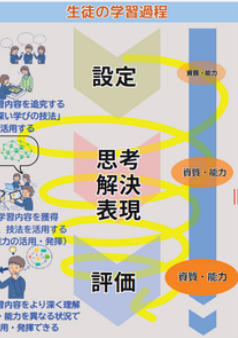

☒ どんな場面で資質・能力を発揮させたいか


☒ 他の授業や生活でも活用できる姿を描けているか


指導案 学習指導要領 生成AI

先行事例の指導案、学習指導要領、生成AIなどの活用

「深い学びの技法」を基に構成する学習過程に着目した手立てを検討する



生徒の学習過程

設定

思考・解決・表現

評価

「深い学びの20の技法」

- ① 学んだ知識を活用して課題や目標を設定する
- ② 知識やデータに基づいて仮説の設定や検証をする
- ③ 視点・観点・論点を設定して思考や表現をする
- ④ R-PDCAサイクルを設定して活動や作品を改善する
- ⑤ 資料やデータに基づいて考察したり検証したりする
- ⑥ 複数の資料や観察結果の比較から結論を導く
- ⑦ 複数の観点や逆思考をして考える
- ⑧ 学んだ知識や技能を活用して思考や表現をする
- ⑨ 仲間と協力し合いや競り上げをする
- ⑩ 師匠や先輩関係、指導性を養う
- ⑪ 学んだ知識・技能を活用して事例研究をする
- ⑫ 理由や根拠を示して論理的に説明する
- ⑬ 学習モデルを活用して思考や表現をする
- ⑭ 自分の言葉で学んだことを整理しまとめる
- ⑮ 体系的な知識や技能を構造化・モデル化する
- ⑯ 複数の資料や作品を批判的に吟味検討する
- ⑰ 命題につけた資質・能力をメタ認知成長につなげる
- ⑱ 学習成果と自己との関わりを振り返る
- ⑳ 学んだことを生かして、次の新しい課題を作る

生徒が「深い学びの技法」を活用できるような手立てを構想

※詳細は次ページの「深い学びにいたる授業」を参照

① 目指す生徒の姿・手立ての検討

深い学び合い

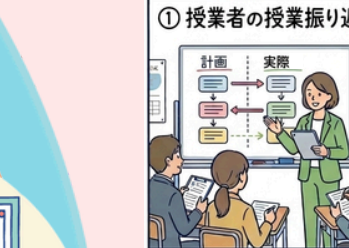
④ 研究成果の協議、共有 新たな授業実践へ

④ 授業改善に向けた新たな気づきの促進

授業の改善に向けた新たな気づきを得る

協議会の後半に、授業で得た気づきを、自分の授業に生かせる言葉にまとめることが有効です。具体と抽象の両方の視点から、自分の授業でも応用できる他の手立てを思考することにつながります。

[参考・引用文献]
○前田 康裕 (2024) . 「まんがで知るデジタルの学び⑨ 授業改善プロジェクト」 (さくら社)



① 授業者の授業振り返り



② 授業協議 (ファシリテーション)



③ 授業のポイントの概念化



④ 自分の授業の改善点を思考



⑤ 全体の振り返り

② 生徒の実際の姿を基に、ねらいや手立ての整合性の協議

生徒の実際の姿を基に、ねらいや手立ての整合性を協議する

授業の見方

授業参観の立ち位置で、生徒の見取りが大きく変わる

生徒の実際の姿

ねらい 整合性の協議 手立て



後方から参観

○授業全体の様子を見取りやすい
▲生徒の反応や変容が見取りにくい



横から参観

○教師の働きかけに対する生徒の反応や変容を見取りやすい
▲立つ位置によって、一部の生徒の様子が見取りにくい



同じ生徒・グループの参観

○生徒の思考などの一連の過程を見取りやすい
▲観察する生徒の様子だけの見取りになり、他の生徒の様子との比較がしにくい

② 授業実践の積み重ね

③ 研究会での研究成果の発表

生徒の実際の姿を見取る視点 (例)

生徒の実際の姿を見取る視点	具体的な観察内容
指導案で予想された反応	予想された反応が見られるか
つまづきの理由	どこで、なぜつまづいているか
ねらいに迫る様相	ねらいに迫る姿が見られるか
思考の一連の過程	どのように思考が変化しているか
関わり合い	関わりによって考えなどがどのように変化したか

ファシリテーションの視点や司会が話し合いを深めるための問い (例)

ファシリテーションの視点	ファシリテーションを深める問い
生徒の実際の姿	生徒は何を考えていたのか。
生徒の思考・理解の変容	その考えはどの場面で変化したのか。
教師の手立て	その変化を生んだ教師の手立ては何か。
「深い学びの技法」と学習過程	「深い学びの技法」によって、生徒の知識・技能はどのようにつながり、活用されていたのか。
授業改善	この実践から、自分の授業に生かせることは何か。

③ ファシリテーションを活用した参加者の理解の促進

ファシリテーションを取り入れ、研究の理解を深める

参観者が授業で気付いた共通のものをまとめること (グルーピング、ラベリング) で、参観者同士で新たな視点や考え方を共有できます。

KJ法

KPT法

協議議題に応じて、観点別のフレーム (Keep[有効]、Problem[改善]、Try[代案]) を設定し、参観者の気づきを共有します。さらに、授業の改善方法も共有できます。

指導案拡大法

授業展開に沿って、教師の働きかけが、生徒の思考や行動にどのように影響したかを分析できます。また、授業者の教授行動など細かい点も分析できます。

検討会や協議会の目的に応じて、ファシリテーション (話し合いを促進する技法) を取り入れることで、参加者のインプットとアウトプットの量や質が高まり、研究の理解が促進されます。参加者が自分事として、研究を捉えることができます。